事例報告「幼稚園での飼育活動の実践」

滝川孝子

本園では，動物飼育を子どもの成長に欠かせない教育活動として，創立以来大事にしています．

現在でも多くの動物を飼い，年齢に合わせてふれあわせています．特に最近は家庭で動物を飼えない子どもたちが多く，保護者にも園での飼育活動は喜こばれています．

なお，園では新しい動物の仲間が来ると，子どもたちと一緒に名前をつけて親しみを持たせています．

６月には園だよりで，身近な小動物を貸していただくように，保護者に呼びかけています．

また，毎日の世話が，自然に愛情と責任や，身体の使い方（ほうきでごみを集める，ちりとりに取る，捨てるなどの普段あまりやらない動きや，動物にやさしく触れる，抱く，そっとおろすなど）を育んでいることを実感しています．

本園では，動物飼育については，何かを育てようという気負いを持たずに，動物から子どもたちも教師も育てられていると思います．

１　園で飼っている飼育動物と子どもたちへ関わらせ方

- にわとり（年長組の飼育当番が世話）
- うさぎ（年中組の飼育当番が世話）
- カメ，金魚（クラスで世話）
- フェレット（職員室で世話）
- 借りた小動物（クラスで世話）

２　飼育に当たっての取り組み

当番活動を始める前に，４月に獣医師に園に来ていただきます．年中組にうさぎの話，年長組にわとりの話を，紙芝居や絵本を使って子どもたちにわかりやすく，動物にとって何が大切なのか，どんなことをすれば喜ぶのかを，話していただきます．80 人を対象に１時間ほどです．（２日間）

お話を聞いたあと，子どもたちが飼育物の世話をしているときの会話を聞くと，「臭いなんて言ったらかわいそうでしょ！にわとりさんはここからでられないんだから」「手を洗ってからじゃないとうさぎさんが病気になっちゃうって，動物病院の先生が言っていたでしょ！」などと言っています．また，話を聞いてからは，家から野菜くずなどを持ってきてくれる子どもも増えてきます．それだけ，自分たちが飼っている飼育動物を大切にしようとする気持ちが育ってくれたのだといます．世話も，最初はやりたい子が先生と一緒に始め，飼育当番が始まっても出来るところから手伝っていきます．終わったら必ず先生が，「気持ちよくなって嬉しそうだね」「ありがとうって言っているみたいね」など子どもたちに，動物の気持ちを代弁します．日を重ねていくと，子どもたちにもそう見えてくるようです．動物たちに声をかけることは大事なことで，朝は「おはよう」散歩に行くときは「行って来るね，おみやげの葉っぱ採ってくるからね」と言っています．それは身近に飼育小屋があるから出来るのだと思います．

引き継ぎの仕方は，にわとりの世話をしている年長さんは卒園してしまいますので，３学期に年中さんに引き継ぎますが，寒い時期なので，年少さんへのうさぎの引き継ぎは，それぞれ進級した４月に行います．下の学年に引き継ぎますので，丁寧にやさしく教えています．

３　長い休み中の世話

原則的には，職員の日直で世話をしていますが，休みに入る前に，保護者に手紙などで預かっていただける方を募集します．

長い方では，一夏預かってくださることもありますが，期間を決めて，何軒かの家に行くこともあります．一度預かると愛着が湧くようで，毎年同じ家に行くこともあります．預かっていただくときには，簡単に世話の仕方をお話ししたり，何かあったときの連絡先として，園でお世話になっている獣医師の電話番号をお伝えしています．

４　出産の事例

にわとりが卵を産むと，子どもたちは何時ひよこになるのか，毎日楽しみにします．卵の数が増えるたびに飼育当番さんから報告があります．

ある年は，夏休み中にひよこになりそうだとわかると，先生をはじめ，世話をしていたクラスの子どもたちが，親を説得して毎日のように様子を見に来ていました．その時は，残念ながら無精卵だったようでひよこにはならなかったのですが，子どもたちの様子を見ていて，日頃世話をしていたからこそ，関心を持ったのだと嬉しく思いました．

またある年では，妊娠しているのを知らずに，夏休みにうさぎを保護者に預けてしまったこともありました．巣作りのために，親うさぎはせっせと毛を抜いていたようですが，それをせっせと掃除していたら，ある朝，子うさぎが生まれていたので，びっくりして獣医師に連絡し，事なきを得ました．

動物を飼っていて嬉しいことは，家族が増えることですが，数が多くなれば全部を園で飼うことが出来ないのが悩みです．

夏休みに生まれた子うさぎの時は，子ども達にお披露目をしたあと，獣医師に保護者向けに手紙を書いていただき，貰い手が見つかったこともありました．

5　病気

動物の病気は，素人ではなかなかわかりにくいのですが，元気が無いということが一番の判断材料かと思います．その見分けが出来るのは，普段の状態を知っていることです．そして気になったときは，獣医師に連絡をして指示を仰ぎます．

心配な時は担任が，家に連れ帰って様子を見ることもあります．きちんと向き合うことが大事だと思います．

6　死

死にも直面します．夏休みに預かって頂いていた園児の家で，うさぎが死んでしまったことがありました．まずは，保護者や園児のフォローを，丁寧にしました．そして，獣医師に原因を調べていただき，幼稚園でお別れ会をしました．

今まで世話をしていたうさぎが，冷たくなり，動かないのを見たり，悲しんで涙を流している先生の姿を見て，子どもたちはたくさんのことを学ぶと思います．

園の裏庭に「小動物のお墓」があります．子どもたちは手を合わせながら，一生懸命お参りをしています．そして，時々お花を供えていたり，手を合わせている姿を見かけます．

言葉で伝えきれないことも，子どもたちはきちんと感じているようです．最近では，家で飼っていた金魚が死んだので，幼稚園のお墓に入れて欲しいと言ってきた保護者の方もいらしてびっくりしましたが，マンション住まいの方でした．

7　保育に取り入れてきた活動

身近に，世話をしている動物がいると，いろいろな保育活動に登場してきます．

よくする活動に絵を描くことがあります．描く前に，改めて観察をさせると，今まで気が付かなかった毛並みや色など，子どもたちは次々に言葉にして伝えてきます．

描いているときも，うさぎやにわとりに話しかけながら，クレヨンや筆を動かしています．そうして描いた絵は，とても生き生きとしていて，今にも動き出しそうです．

また，劇遊びにも出てきたり，グループの名前になっていたりします．これらは，子どもたちから自然に出てくると言うよりも，先生が意図的に登場させて，改めてクラスの一員として，飼育動物を位置づけることもあります．

8　今後の問題点

本園で飼っている動物たちは，大分高齢化してきています．小さいうちは，かわいいかわいいとどの子も率先して世話をしてきましたが，だんだんと老いていく動物たちを，ただ当番だから仕方なく世話をするのではなく，愛情を持って世話をする大切さを伝えていく難しさも感じています．また，もっと身近なところで最近感じたことは，日々の世話の仕方で，子どもたちは先生に教えてもらったとおりに世話をしていて，だんだん上手になっていくのですが，臨機応変には出来ない．そこを先生たち大人が，きめ細かく見てあげなくてはいけないと思いました．

暑い時期と寒い時期のうさぎ小屋の置く場所など，ちょっとした配慮で動物たちも居心地良く生活できると思います．

そのためには，飼育しているクラスの先生だけに任せるのではなく，職員みんなで飼っているという意識が大事だと思います．

9　まとめ

集団生活の場である幼稚園での飼育活動には，いろいろな問題がでてきます．いままでも，動物アレルギーのこと，鳥インフルエンザのことなど，保護者が心配する声も聞かれましたが，本園では，その都度獣医師に相談して保護者に対応してきました．

今後も飼育活動に対しては，獣医師と連携を持って，より安心して楽しい活動になるようにしていきたいと思います．

1　年長組はニワトリ（チャボ）の世話．年中組はウサギの世話をする．毎年４月に園の委嘱獣医師に導入授業をしてもらう．

2　獣医師の話を真剣に聞いている子どもたち

3　こどもたちは，最初はキャーなどと言っていたが，先生方の補佐により，怖がることもなく次々と神妙に抱いている．

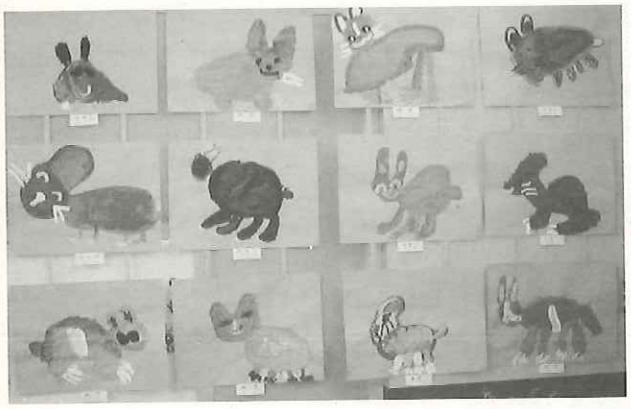
4　始めての体験だが，落ち着いた環境で指導を受けるため，膝に動物を置いて抱かせると，子どもたちの顔に，うれしそうな笑顔が見られる．

5　ウサギのケージを掃除している．

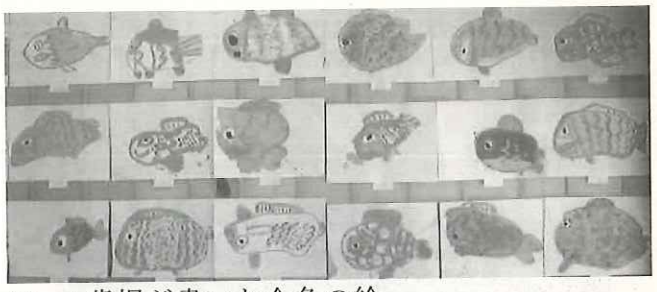
6　なれない箒を使ってチャボ小屋の掃除．

7　仏さまの前で,園獣医師からチャボの死因を聞いている子どもたち

8　手をあわせてお別れしている



9　4歳児の書いたウサギの絵



10　4歳児が書いた金魚の絵

11　5歳児の書いたチャボの絵

体験の成果を得るポイント

- 生き物への配慮　―>子どもへの配慮
  担当の先生だけの仕事だと思わない
  命を守るにはきめ細かい観察と対応
- 保護者の理解を求めて巻き込む
  保護者教育に時間をかける
  休日の世話、アレルギー・衛生不安
- 専門家の支援体制(学校獣医師)
  相談相手として地域にいること

12　まとめ　成功の鍵

(武蔵野大学附属幼稚園主事)